

上には、東西方向に西海道の田河道が通っていた。この時期にはまだ豊前国府の政庁は造営されていなかつた可能性が高いが、国府の前身となる大規模集落が東方約五キロメートルの位置にある。国府との密接な立地環境は、筑後国府と高良山、肥前国府と帶隈山、備中国府と鬼ノ城、讃岐国府と城山など数キロメートル以内に近接する例が多いことが知られている。御所ヶ谷神籠石の場合も、大宰府方面から豊前国を中心部に至る要地に立地し、人馬の移動を確認しやすい高所に営まれている。

第三節 仏教の伝播と初期寺院

一 豊津の初期寺院

(一) 上坂廃寺建立の背景

仏教の伝来と広がり 日本に仏教が伝えられたのは宣化三年（五三八）のこととされているが、これは朝鮮半島の百濟国の聖明王から欽明天皇に対して釈迦像・幡・經典などが贈られたことを指している。
神祇信仰のあつた日本では、その後、仏教の受容の可否をめぐつて朝廷の有力豪族の間で争いが繰り広げられている。すなわちそれを受け入れようとする奉仏派の蘇我氏と神祇信仰を重視し他国神をあくまで受け入れまいとする反仏派の物部氏・中臣氏との対立である。

一連の動きを年次に追つてみると、次のような経過をたどつている。

五三八（宣化三年）……………百濟の聖明王、朝廷に仏像・經論を贈る。（仏教の公伝）

五五二（欽明十三年）（十・一）：百濟の聖明王、金銅仏・經論等を天皇に贈る。

大臣蘇我稻目、その家を寺とする。

物部尾輿ら、疫病流行のため仏像を難波の堀江に捨て、寺を焼く。

五七七（敏達六年）（十一・一）：百濟王から贈られた經論・僧尼・呪禁師・仏工・寺工を難波の大別王の寺に置く。

五八四（敏達十三年）……………蘇我馬子が鹿深臣・佐伯連の所有していた弥勒石像はかを安置して、司馬達等の娘（善信尼）ら三人を出家させる。馬子、石川宅を仏殿とする。

五八五（敏達十四年）（二・十五）：蘇我馬子、塔を大野丘の北に立てて、柱頭に仏舍利を納める（日本書紀）。

豊浦前に塔柱を立てて大会を営む（元興寺縁起）。

（二・二十四）……………馬子、病気にかかる。疫病大流行。

（三・一）……………物部守屋ら、崇仏の崇りを奏上し、天皇は廢仏の詔を下す。

（三・三十）……………守屋が塔を倒し、仏像・仏殿を焼き、尼僧を拘禁する。残りの仏像を難波の堀江に投棄する。

五八七（用明二年）（四・一）……天皇・仏教を信仰する。蘇我馬子と物部守屋、崇仏の可否を争う。

（七・一）……………馬子・聖德太子ら、守屋を滅ぼす。

（元興寺縁起）。百済から、僧侶・仏舍利・寺工・露盤博士・瓦博士・画工を贈られる。蘇我馬子、百済僧から受戒し、学問尼善信らを百済に派遣する。飛鳥の真神原に法興寺（飛鳥寺）を建て始める（日本書紀）。

五九四（推古二年）（一・一）……聖德太子、蘇我馬子に仏教興隆の詔を下す。

（『日本文化史総合年表』岩波書店 一九九〇から抜粋）

用明二年（五八七）物部氏が滅ぼされたあと、崇峻元年（五八八）には日本最初の本格的な寺院である法興寺（飛鳥寺）が蘇我氏によって奈良県南部飛鳥の地に建立された。

更に推古二年（五九四）には推古天皇の摂政であった聖德太子から蘇我馬子に「三宝興隆」の詔が出されると中央の豪族たちも競つて寺院の建立を始めたと伝えている。稻垣晋也氏の調査では、飛鳥時代の寺院数六二のうち大和二七・山城六・河内一五・攝津五・近江三・播磨一・備中三・安芸一・武藏一となつており、仏教が近畿地方を中心にして根付き始めたことをうかがわせる。

また、長い間仏教に対して中立的な立場を取り続けていた天皇も、舒明天皇が仏教に帰依し、百済大寺の造営を始めて、仏教はまた転換期を迎えることになった。

大化元年（六四五）には、「仏法興隆」の詔が出されて、蘇我氏滅亡のあと天皇自らが仏法興隆の主導権を握り、僧尼の管理機構の整備なども行われた。このあと「仁王会」などの仏教行事が宮廷でも行われるようになつていつたが、特に天武・持統天皇の仏教興隆政策は「金光明經」を読唱・講読させたように「鎮護



- 1 天台廃寺跡 田川市鎮西町（旧田川郡）
- 2 樟市廃寺 行橋市福丸（旧京都郡）
- 3 菩提廃寺 京都郡勝山町菩提（旧京都郡）
- 4 木山廃寺 京都郡犀川町木山（旧仲津郡）
- 5 豊前国分寺跡 京都郡豊津町国分（旧仲津郡）
- 6 上坂廃寺 京都郡豊津町上坂（旧仲津郡）
- 7 垂水廃寺 築上郡新吉富村垂水（旧上毛郡）
- 8 相原廃寺 中津市相原（旧下毛郡）
- 9 小倉池廃寺 宇佐市上元重（旧宇佐郡）
- 10 虚空蔵寺跡 宇佐市駅川町山本（旧宇佐郡）
- 11 法鏡寺跡 宇佐市法鏡寺（旧宇佐郡）
- 12 弥勒寺跡 宇佐市宇佐町（旧宇佐郡）
- 13 塔の熊廃寺 下毛郡三光村（旧下毛郡）

第5図 豊前国の古代寺院分布図

「國家」の仏教政策を推し進めることになった。これは旧来日本の神祇信仰にない国家の概念を仏教の中に求めようとしたものである。そしてこの時期の寺院建立は地方豪族まで及んで、ほぼ日本全国に建立された寺院は五九二か寺に達したといわれる。

豊前地方の仏教

七世紀後半になって、豊前国にも堂塔を備えた寺院の建立が始まる。それは天武・持統朝における国家の基本概念として仏教を取り入れるという政策と密接に関係することともに、仏教の持つ現世安穏、後生善処の考え方が有力豪族に受け入れられたことにより、初期の寺院が造営され始める。

第3編 古代（奈良・平安時代）

第1表 豊前地方の古代寺院

この地方の仏教の伝来は朝鮮半島に近いという地理的条件から仏教の公伝前に渡来人たちが仏教を持ち込んだという考え方もある。正倉院に保管されている大宝二年（七〇二）の豊前国戸籍の断簡には多くの渡来系氏族の名がみられることがからすれば、考えられることである。また、渡来系氏族の名に秦氏の名が多いことは留意すべきことである。秦氏はいち早く仏教取り入れ振興に力を注いだ蘇我氏と深い関係にあった渡来氏族である。このようにしてみてくると、六世紀後半から七世紀前半に京都郡、仲津郡に所在する豊國の大首長墓に大型方墳が採用されることも蘇我氏との関係において見逃すことができない。

更に仏教が宇佐八幡宮において、中央大和政権より先に仏教のもつ国家概念を取り入れた神仏混交が行われたことも見逃すことはできない。

これは、道鏡事件における中臣習宜阿曾麻呂に告げられた仏教が国家の基本であるとする託宣と、和氣清麻呂に告げられた日本古来の神祇が国家の基本であるとした託宣の相異なる託宣が宇佐八幡宮から発せられることに表れている。と同時に仏教勢力が最も強かつたと思われる豊前国で、神祇が国家の基本であり、仏教はその国家観を補うものとして位置付けられたことがその後の日本史に大きく影響した（第5図、第1表参照）。

（二）上坂廃寺

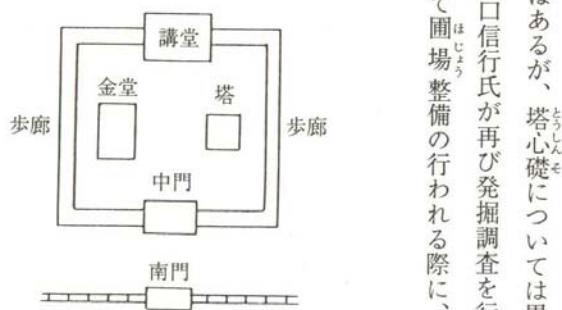
豊津町でも上坂に白鳳時代の寺院跡があり、上坂廃寺と呼ばれている。祓川の左岸謎に包まれた寺院
で、川と上坂の集落との間に広がる水田下に廃寺は埋没している。水田面に散乱する瓦片から寺院跡の存在が早くから推測され、寺院の性格についての推論も行われてきたが、古い役場の調査

では国分寺の伝經堂としている。またここが国分尼寺跡と考える研究者もいた。しかし、出土瓦（百濟系）からはこの廃寺の創建が国分寺の建立よりも約半世紀さかのぼることを示しており、国分尼寺が別の位置に確認されるようになった現在では、なぜこの地にこの寺院が建立されたようになつたかを含めて、この寺院の性格については今後の研究に待つところが多い。

上坂廃寺跡の遺構・出土品 前出のように多くの問題点が残されている寺院跡ではあるが、塔心礎とうしんそについては黒瀬仁六氏の実測調査の後、昭和二十七年（一九五二）には原口信行氏が再び発掘調査を行つて、その後昭和五十八年には上坂地区が県総合パイロット事業によつて圃場整備の行われる際に、遺構確認



第6図 上坂廃寺跡試掘溝と出土遺物図
(昭和56年)



上坂廃寺伽藍配置予想図

認調査が行われた（第6図参照）。現在までに出土・確認されている遺構や出土品には、次のようなものがある。

（1） 塔心礎

塔心礎石、礎石（柱座のあるもの）、百済系軒先丸瓦、重弧文軒先平瓦、太宰府系軒丸瓦・軒平瓦、單弁七葉軒丸瓦、鴟尾片（第8図、グラビア）、土師器、綠釉陶器片

このうち主な遺構・出土品についてみることにする。

（2） 出土瓦

長径二・八メートル、短径二・二メートルの花崗岩で、中心部に直径八五センチ、深さ一二・二センチの穴が、更にその中央部に直径一七・六センチ、深さ一一・四センチの舍利孔がある（二重柄穴）。地山を掘り込んだ壙中に版築して据える。周囲には基壇跡は認められない（第9図）。

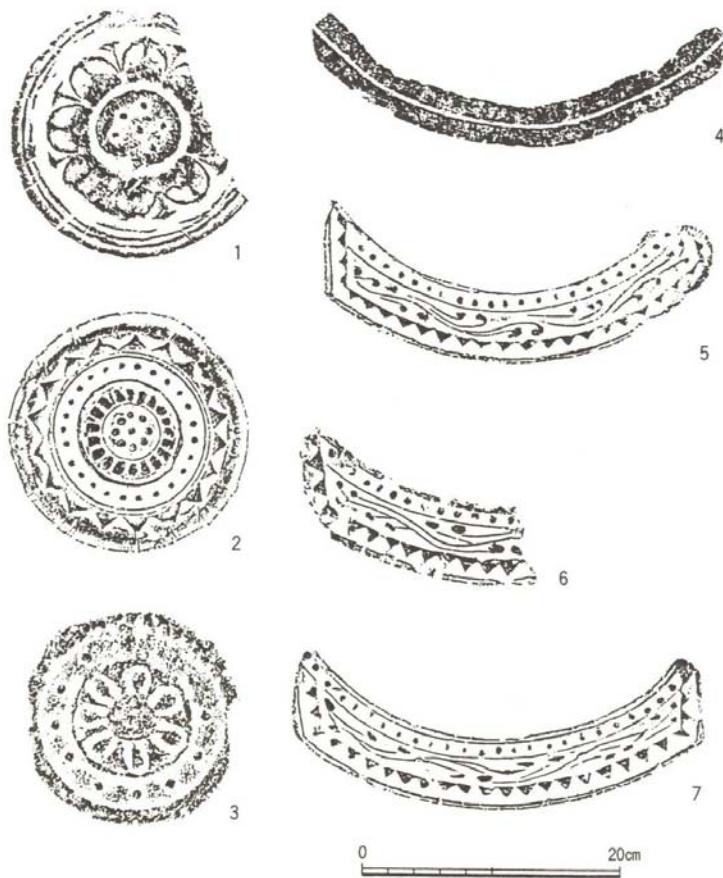
• 百済系单弁八弁蓮花文軒丸瓦

豊前地方に広く分布しており、近くでは椿市廃寺・木山廃寺からも出土している。この瓦は重弧文軒平瓦とセット関係をなしていると考えられており、七世紀後半ごろと推定されている（第7図の1）。

• 大宰府系（老司式）单弁十複弁十九弁蓮花文軒丸瓦

豊前国府・豊前国分寺跡からも出土しているが、蓮弁・珠文・凸鋸齒文などがすべて一致するので、同范の可能性が強い（第7図の2）。

第3編 古代（奈良・平安時代）



1 百濟系軒丸瓦 2 大宰府系軒丸瓦（老司式） 3 単弁七弁軒丸瓦
4 重弧文軒平瓦 5～7 大宰府系軒平瓦

第7図 上坂廃寺跡出土瓦（九州考古学第59号より）

扁行唐草文軒平瓦
へんこうとうからくさもん

凸鋸歯文・珠文の数・唐草の流れの方向や特徴から三種類に分類されている（第7図5・6・7）。このうち6は豊前国分寺跡からも出土しており、7は木山廃寺跡（犀川町）からも出土している。2の軒丸瓦とこの軒平瓦類はセットをなし、製作時期については、八世紀中ごろのものと考えられている。

单弁七弁軒丸瓦

昭和五十八年の調査時に新しく発見されたもので、九州では他に例がない。文様構成や技法から九世紀前半代に想定されている（第7図3）。

(3)

遺構

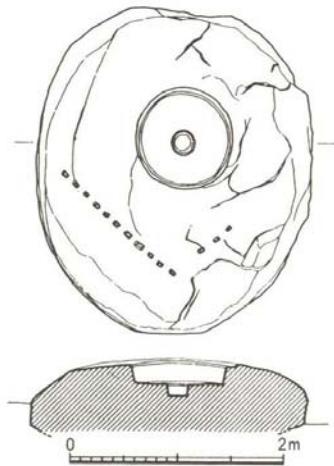
金堂跡
こんどうしき

塔心礎の心々から西側に二五メートルから四五メートル離れた地域に瓦溜り溝に囲まれた区画があつた。南北に設けた試掘溝でも外幅二七・五メートル、内幅一七・五メートルの区画が認められ、塔との関係から金堂ではないかと推定されている（第6図参照）。

講堂跡

心礎の北側に二七・五メートルと三五メートルの二地点で礎石が出土し、あとに礎石には柱座が造り出されていた。この礎石の西側二〇～三〇メートル地点でも以前に礎石が出土したといわれ、塔と金堂の位置関係から、ここが講堂跡と推定されている（第6図参照）。

第3編 古代（奈良・平安時代）



第9図 上坂廃寺塔心礎実測図
(九州考古学第59号より)



第8図 上坂廃寺出土鷲尾片



第10図 上坂廃寺跡の圃場整備

**上坂廃寺の
存立時期** 上坂廃寺がいつ建立され、いつ廃絶したのかについては、出土瓦を手がかりに幾つかの論考がなされているが、調査者の酒井仁夫氏は「豊前地方の寺院から出土する瓦のありかたから、

はじめは七世紀後半代の百濟系の要素を取り入れた性格をなしていたが、八世紀も中ごろになると畿内若しくは大宰府との密接な関係が生じてくることに気付く。昭和五十八年に出土した瓦などから考へると、現段階で上坂廃寺は七世紀後半代から九世紀ごろまで存続していた可能性があろう。」と述べている。

**圃場整備と
上坂廃寺** 上坂廃寺が、豊前地方の初期寺院の中で重要な位置を占めることは、広く認められているところであるが、前出の圃場整備事業に際しては調査体制も組織されないまま、簡単な試掘溝を入れた調査が行われただけであつた。この調査は寺域に東西南北に入れた三本の試掘溝を中心に行われたが、工事中の現場は目を覆うものがあつた。露出した心礎上を重機が走り、瓦片は地上や排土上に散乱し、

幾つかの礎石は掘り返されるといった状況であつたし、多くの瓦類が蒐集家に持ち去られるままにまかされていた。

このような状況から見て、推定ではあるが寺域推定地の約三分の二は消滅してしまったと思われる。金堂跡・講堂跡や全体の伽藍配置についても正確には把握されていない。廃寺は謎に包まれたままほぼ消滅しているが、将来心礎部分を含めて残存していると思われる北辺一帯の調査があるとすれば、より周到な計画の下に行われることが望まれる（第10図参照）。